



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

国際バカロレアの教育システムを活かした教育実践 ：2023年度の校内研究と授業研究会

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 東京学芸大学附属国際中等教育学校 公開日: 2024-04-25 キーワード (Ja): ETYP:教育実践 キーワード (En): 作成者: 菅原, 幹雄 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属中等教育学校 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/0002000374 |

国際バカロレアの教育システムを活かした教育実践

—2023年度の校内研究と授業研究会—

Educational Practices Utilizing the International Baccalaureate Educational System

—In-school Research and Open School for the 2023 School Year—

研究部・特別研究推進委員会 菅原 幹雄

要旨

今年度は校内研究テーマを「探究の問いが育む概念的理解～IBの趣旨を活かした授業開発とその普及」と設定し、8つの「研究グループ」に分かれて概念的理解を中心に据えて授業開発を行った。本稿は、先述した校内研究テーマの趣旨と、今年度の校内研究の内容、および11月22日(水)に実施した授業研究会の概要、および今後の課題をまとめたものである。

1章 今年度(2023年度)の校内研究テーマについて

1節 本校における研究テーマの方向性について

本校はIB(International Baccalaureate、国際バカロレア)のMYP(Middle Years Programme、中等教育プログラム)およびDP(Diploma Programme、ディプロマプログラム)の認定校として、のIB教育の理念やシステムを活かした教育実践研究を行っている。また本校では、隔年で公開研究会と授業研究会を交互に開催しており、今年度は授業研究会を開催する年である。授業研究会は、来年度の公開研究会における研究の方向性を見据え、その研究プロセスの途中段階で授業実践研究を共有し、翌年の公開研究会に向けて改善点を見出すことを目的として開催するものである。

昨年度は「『学びの転移』を促す概念・文脈の活用～国際バカロレア(IB)の教育システムを活かした探究学習～」という研究テーマを設定し、校内研究を行った。その成果として、令和4(2022)年11月26日(土)に本校で第8回公開研究会を実施した。そこからは、「教科横断」や「クロスカリキュラム」等による「学びの転移」を考えるにあたって「概念」が重要な役割を果たしているという示唆を得た⁽¹⁾。

文部科学省IB教育推進コンソーシアムの統計によると、2023年12月31日時点における日本国内のIB認定校等数は229校である。2023年4月の時点で目標として掲げていた200校を達成し、その後も数は増えている。しかしながら、この数は全体からするとわずかなものである。2022年5月における日本国内の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校の総数は34232校であるから、IB校の割合は0.6%程度でしかない。全体の学校数は少子化等の影響から減少傾向にある。その状況下においてIB校の数が増えていることは、IB教育が評価されていることだと考えるが、少数派であることに違いはない。このような状況を踏まえると、本校が発信していく教育実践は、IB校以外の学校でも参考にしていただけるようなものでなければならない。そのことを念頭において、校内研究のテーマは設定している。

2節 学習指導要領とIB教育の関係と今年度の校内研究テーマ

現行の学習指導要領においては、学校教育全体及び各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを、資質・能力の三つの柱を踏まえながら明確にすることが求められることが総則の解説に記載されている⁽²⁾。特に、育成を目指す資質・能力の具体例については、平成28年の中央教育審議会答申において、以下のように大別された。

- ・ 例えば国語力、数学力などのように、伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる力としての在り方について論じているもの。
- ・ 例えば言語能力や情報活用能力などのように、教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される力について論じているもの。
- ・ 例えば安全で安心な社会づくりのために必要な力や、自然環境の有限性の中で持続可能な社会をつくるための力などのように、今後の社会の在り方を踏まえて、子供たちが現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な力の在り方について論じているもの。

学習指導要領解説では、この2点目及び3点目を「教科等の枠組みを越えた資質・能力の育成にもつながるもの」としている。

一方、本校で実施しているMYP、DPに限らず、IB教育ではその課程によらず概念的理解が一貫して重視されている。生徒は、さまざまなものの見方に基づく概念に触れるにつれ、概念的理解を深めるようになるとしている⁽³⁾。概念を模索し、生徒が目指すのは、

- ・ 教科をより深く理解する
- ・ 教科の枠組みをこえた考えを理解する
- ・ 複雑な考えに取り組む。アイデアとスキルを新しい状況に転移（transfer）させたり応用したりする

ことであるとしている。中央教育審議会答申の記述とIB教育が目指す概念的理解を比べると、中央教育審議会答申に記述された資質・能力が具体例であることに由来すると思われるが、IB教育が目指す概念的理解のほうがより抽象度の高いものであり、中央教育審議会答申に記述された資質・能力は生徒の学習場面や実社会での活用場面を想定したものである。これらは、その表現こそ違うものの、その目指す方向性は同一であると考えられる。つまり、概念的理解を目指した授業開発は、学習指導要領が目指す資質・能力の具体例であるということだ。以上を踏まえ、今年度は研究テーマを「探究の問いが育む概念的理解～IBの趣旨を活かした授業開発とその普及」と設定した。昨年度までの校内研究を踏まえつつ、「探究の問い」（事実に関する問い、概念的問い、議論を喚起する問い）に焦点をあて、生徒の概念的理解を育む授業開発に取り組んだ。IB教育における「探究の問い」とは、「探究テーマ」から導かれる。そしてIB教育における「探究テーマ」は、その单元において教員が生徒に理解して欲しいと意図する概念的理解といえる。概念的理解を育むために授業でどのような発問を行う必要があるのかが、IB校以外の方にもわかりやすく伝わることを期待している。またこの研究成果は、教科横断的な授業や文理融合教育の実現にも役立つと考える。

3節 研究グループの設定

令和元（2019）年度よりSSH第2期の指定が始まった。それと同時に校内研究体制として、同一学年の異教科の教員で構成された「研究グループ」による授業研究を開始した。今年度は、同一学年の異教科の教員で構成された学年グループとして「第1学年グループ」、「第3学年グループ」、「第4学年グループ」、「DPグループ」を設定するとともに、2つの教科グループ（「外国語科グルー

プ」、「数学グループ）」と「国際教養グループ」の計8つの研究グループを設定して校内研究を進めた（表1参照）。今年度の研究グループの設定にあたっては、本校教員に対して行った希望調査をもとにした。なお、授業研究会では、すべての研究グループの授業を公開し、研究グループごとに授業協議会を開催した。

表1 今年度（2023年度）の研究グループの構成

| 研究グループ | 教科 | 国語 | 社会 地歴 公民 | 数学 | 理科 | 保健 体育 | 芸術 | 外国 語 | 技術 家庭 情報 | 養護 |
|----------|----|----|----------------|----|----|----------|----|---------|----------------|----|
| 第1学年（中1） | | 1名 | 1名 | | 1名 | 2名 | | | 1名 | 1名 |
| 第3学年（中3） | | 1名 | 1名 | | | 1名 | 1名 | 1名 | | 1名 |
| 第4学年（高1） | | 1名 | 2名 | | | 1名 | 1名 | | 1名 | |
| 第5学年（高2） | | | | | 4名 | 1名 | | | 1名 | |
| 外国語科 | | | | | | | | 6名 | | |
| 数学科 | | | | 6名 | | | | | | |
| DP | | 1名 | 1名 | 1名 | 2名 | | | 1名 | | |
| 国際教養 | | 3名 | 2名 | | | | | 1名 | | |

4節 校内研究会の実施

本校では放課後の時間を使って、毎月1回のペースで校内研究会を実施している。今年度からは、昨年度と比べると回数を3回減らし、年間で9回の校内研究会を次のように開催した。回数を減じた理由は、高等学校における観点別評価導入による学期末の成績処理業務の増加に対応するためである。令和元(2019)年度より継続している異教科同一学年による研究グループ制度は、教科等横断的視点から成果を挙げている一方で、同一教科による取り組みに対する不十分さを指摘する意見が校内では挙がった。それを受けて昨年度の校内研究においては、学年グループ以外の研究グループとして、社会地歴公民、国語、数学、SSH、生徒主体の探究、評価といった研究グループを設定した。さらに今年度は、年9回の校内研究会の時間に「IB教育研修」を継続的に盛り込み、その中でIB教育に対するスキルアップとともに、教科で協働する時間を可能な限り確保することとした。以下に、今年度実施した校内研究会の概要を記す。

第1回：4月5日（水）11:30～12:20 校内研究に関する今年度の方針・年度当初の確認

- (1) ISS チャレンジオリエンテーションについて
- (2) 国際教養について（国際教養委員会）
- (3) 今年度の校内研究について～これまでの公開研究会・授業研究会の振り返りと昨年度の課題をふまえて～（研究部）
- (4) SSH 研究開発の概要について（サイエンス委員会）

第2回：5月16日（火）16:10～17:00 研究グループミーティング①

- (1) 今年度の校内研究の方向性（次年度の公開研を見通して）・授業研究会について
 - ・IBの考える「概念的理解」について
 - ・IB教育研修①「IDUとMYPについて」

・SSH について

(2) 研究グループミーティング① (研究テーマの設定、等)

第3回：6月14日(水) 15:45～17:00 DPとMYPの5年評価への対応 (IB委員会)

(1) IB教育研修②「ATLの明示的な指導を授業内で実践しよう」

(2) SSH第3期申請に向けて「本校の強み、現在の課題、今後の展開をテーマ別に協議」

(3) 研究グループミーティング② (研究テーマの設定、等)

第4回：8月30日(水) 13:30～16:00 IB教育研修③

(1) ATL教育実践インタビュー (異教科教員によるグループワーク)

(2) 教科で評価しやすいATLの作成と、文部科学省の観点別評価を関連づける (教科毎)

第5回：9月25日(月) 16:00～17:00 研究グループミーティング③

(1) IB教育研修④

・私の授業の中のIB～事例紹介～

・教科でのATL「ATLスキル・ディスクリプター (記述パターン)」

(2) 研究グループミーティング③ (研究テーマの設定、等)

第6回：10月21日(木) 16:15～17:00 研究グループミーティング③

(1) IB教育研修⑤「ATLスキル・ディスクリプター (記述パターン)」

(2) 課題研究モデレーション

第7回：11月13日(月) 16:00～17:00 研究グループミーティング④

(1) IB教育研修⑥「ATLスキル・ディスクリプター (記述パターン)」

(2) 研究グループミーティング④ (研究テーマの設定、等)

第8回：1月18日(火) 16:15～17:10 研究グループミーティング⑤

(1) IB教育研修⑦「ATLスキルツールキット」

(2) 研究グループミーティング⑤ (研究紀要の原稿の検討・確認)

第9回：2月17日(木) 16:15～17:00¹

(1) IB教育研修⑧「ATLスキル」

(2) 国際教養研修「6年一貫の国際教養の取組みについて」

2章 授業研究会の実施について

1節 授業研究会の概要

今年度の授業研究会は、以下のように実施した。

1. 日時： 令和5(2023)年11月22日(水) 13時～17時
2. 会場： 東京学芸大学附属国際中等教育学校
3. 時程： 12:20～受付・生徒課題研究ポスター発表
13:20～14:10 公開授業Ⅰ
14:30～15:20 公開授業Ⅱ
15:40～17:00 授業協議会
17:10～17:50 SSH情報交換会

¹ 原稿執筆時(令和6年1月末)においてはまだ実施していないため予定を記載した

4. 後 援： 東京都教育委員会、練馬区教育委員会

5. 参加申込： 253 名

研究グループによる授業公開と研究協議会を開催した。事後アンケートからも多くのコメントをいただくことができた。

2 節 公開授業と授業協議会の実施

今年度の授業研究会では、以下のように公開授業と授業協議会を実施した。各研究グループの授業主題と協議会主題は、今年度の研究テーマと関連するように設定されている。その詳細については、本研究紀要の各研究グループの項目を参照されたい。

表 2 研究グループ毎の授業主題・授業者・指導助言者一覧

| |
|---|
| <p>第1 学年グループ 公開授業Ⅱ [中学1 年・保健体育] 授業主題：健やかな生活を送るための判断力の育成 授業者：谷口善一（保健体育）・新川夕貴（養護）</p> |
| <p>外国語科グループ 公開授業Ⅰ [中学1 年・英語] 授業主題：新学習指導要領の理念と IB の概念学習を両立する中学英語授業づくり －令和の Rakugo スタイル創作を通して－ 授業者：杉村諒（英語）</p> |
| <p>国際教養グループ 公開授業Ⅰ・Ⅱ [中学1 年・英語] 授業主題：国際教養講座「国際理解」編の実践―第 5/6 回「コバルト会議」― 授業者：藤木正史（社会）・山根正博（国語）・廣瀬充（国語）・小林万純（英語）</p> |
| <p>第3 学年グループ・公開授業Ⅱ [中学3 年・音楽×保健体育] 授業主題：概念「つながり」を活かした教科横断的授業 授業者：橋本みゆき（保健体育）・飯田光一郎（音楽） 指導助言者：藤野智子 東京学芸大学大学院教育学研究科</p> |
| <p>第4 学年グループ・公開授業Ⅱ [高校1 年・地理総合] 授業主題：概念「システム」に基づき転移スキルを育成する単元設計 授業者：中村文宣（地歴公民） 指導助言者：藤沢誉文 高知県立高知国際中学校・高等学校</p> |
| <p>第5 学年グループ・公開授業Ⅱ [高校2 年・SS 生物] 授業主題：概念「関係性」による教科間連携の提案 授業者：伊藤穂波（理科）</p> |
| <p>数学科グループ・公開授業Ⅰ [高校2 年・SS 数学Ⅱ] 授業主題：「概念的理解」を志向する数学科授業のデザインと実践 －極限と微分積分の考え－ 授業者：指田昭樹（数学） 指導助言者：成田慎之介 東京学芸大学 大学院教育学研究科</p> |
| <p>DP グループ 公開授業Ⅰ・Ⅱ [高校2 年・TOK] 授業主題：TOK の問いが育む概念的理解 授業者：高松美紀（国語）・TroyHammond（外国語） 指導助言者：松崎秀彰 茗溪学園中学校高等学校</p> |

3節 生徒課題研究発表と SSH 情報交換会の実施

昨年度実施した公開研究会と同様、今年度も公開授業開始前に「生徒課題研究発表」を、授業協議会後には「SSH 情報交換会」を行った。

本校は、6年一貫で教育を行う中等教育学校であることの利点を活かし、6年一貫した課題研究の取組みを、本校独自の学習領域「国際教養」として行っている。今回実施した「生徒課題研究発表」は、今年度生徒が取り組んでいる課題研究の中間発表という位置づけで、各自がその成果をポスタープレゼンテーションの形で参加者に対して行った。

今年度は、SSH 第2期の最終年度であり、今年度は第2期の総括を第3期申請に向けて取り組んでいる。「SSH 情報交換会」では、生徒が自らの興味関心をもとに探究活動の仮説を設定するプロセスに関して、本校の理数探究における指導事例を共有しながら、参加された先生方と情報交換を行った。また、今年度の SSH の取組みについても共有した。

3章 今年度の取組みから得た課題と次年度に向けて

1節 授業研究会の参加者目的から

授業研究会後に実施した事後アンケートでは、参加者 253 名のうち 93 名から回答を得ることができた。下記の表3は、授業研究会の事後アンケート項目のうち、参加目的（複数回答可）をまとめたものである。

表3 参加者アンケートより参加目的について

| 項目 | 回答 | 割合 |
|---|----|-------|
| カリキュラムマネジメントの手法とそれに伴う授業開発やその実践 | 19 | 20.4% |
| 「国際教養」（6年一貫の探究活動）を中心に据えた教育課程における授業開発やその実践 | 13 | 14.0% |
| 「課題解決学習」（文脈に沿った探究学習）を重視する授業開発やその実践 | 26 | 28.0% |
| 教科等横断的な視点による授業開発やその実践 | 40 | 43.0% |
| 概念的理解を重視した授業開発やその実践 | 56 | 60.2% |
| 学習の転移を促す授業開発やその実践 | 25 | 26.9% |
| IB(MYP)への取組み | 40 | 43.0% |
| IB(DP)への取組み | 35 | 37.6% |
| SSH への取組み | 15 | 16.1% |
| 本校生徒の課題研究発表 | 18 | 19.4% |
| その他 | 3 | 3.2% |

最も回答割合が高いのは、「概念的理解を重視した授業開発やその実践」（60.2%）である。これは授業研究会の研究テーマであるから、当然と言えるだろう。それに次ぐ回答は、「教科等横断的な視点による授業開発やその実践」（43.0%）、「IB(MYP)への取組み」（43%）、「IB(DP)への取組み」（37.6%）となっている。先にも述べたが、本校にとって今年度は SSH 第2期の最終年度である。その研究開発課題は『「学びの本質」を捉え、SOCIAL CHANGE をもたらす科学技術人材の育成』であり、以下の3つの仮説を立てて研究開発に取り組んできた。

- ・ 仮説1：実社会の状況を取り込んだ探究的な学びを実現する授業設計は、グローバルな視野と柔軟な科学的思考力の育成に有効である。
- ・ 仮説2：生徒課題研究および理数探究活動は、課題発見力、情報収集力、分析・評価力、自律的活動力、コミュニケーション力等の研究スキルの育成に資する。
- ・ 仮説3：仮説1・2における中高6年間の授業と課題研究のスパイラルは、生徒に SOCIAL CHANGE の視点をもたらす。

特に仮説3にあるように、本校で行う授業は生徒の課題研究に活かされるものである。その点について外部への研究成果の発信が不十分であったことが、「「国際教養」（6年一貫の探究活動）を中心に据えた教育課程における授業開発やその実践」の回答率が14%に止まっていることがらうかがある。IB教育と、それを活かして概念的理解の重視や教科等横断的な視点に立った授業開発が、生徒の課題研究の中に活かされている様子や実感は、日々の教育実践のなかで感じていることだ。本校のHPで公開されている報告書には、その成果が記載されている。それを外部に発信できるような研究会の企画のあり方について、検討が必要だろう。

2節 授業研究会に対する「ご意見・ご感想」から

公開授業については、生徒の概念を言語化しようとする姿勢や、他の教科やカテゴリーに関連付けて考える姿勢を評価する意見があった。一方、授業で扱った概念的理解が、他の教科科目に転移されるのかについて疑問を持つ意見があった。授業で扱った概念的理解は、当然、その文脈に依存した理解として生徒の中に構築されると考えられる。したがって、その概念的理解は似たような文脈であればあるほど転移しやすいことが想定される。一方 MYP では各教科における重要概念が定められており、教科の理解を超えた理解を表すものとされている⁽³⁾。重要概念に焦点を当てた教科横断的な授業開発はこれまでも行ってきたが、概念的理解と重要概念の関係を整理できるような授業開発が必要になるのだろう。

授業協議会については、概念的理解や指導の意図、教科等横断的な視点などについて、深い協議を行えたという意見が多かった。特に、質疑に対して、複数の教員から丁寧な返答があったという回答があった。参加された多くの先生方にとって、有意義で刺激を与えることができる協議会になったと考えられる。一方、協議会の時間をもっと取れると良かったという意見や、その実施形態についての工夫の余地があったのではないか、という意見もあり、今後の検討課題とする。

SSH 情報交換会では、SSH 事業という枠組みよりも、本校が6年一貫で行っている探究の取組みと、それによって育つ生徒の気質に対する関心が高いと感じた。この点については、今後の研究課題となり得るものだと考える。協議の時間が充分に取ることができなかったことに対する意見もあり、開催時間との兼ね合いもあるが、ICT 機器の活用を踏まえた検討が必要だろう。

3節 本校教員の授業研究会後の振り返りから

授業研究会終了後、本校教員を対象として振り返りアンケートを Microsoft の Forms を用いて行った。その記述から、今後の校内研究の実施に向けた考察を行う。

まず、冊子作成を負担に感じる意見や2年に1回の開催で良いという意見が多く見られた。大学の附属学校としての使命から、教育研究は継続して行わなければならないと考えるが、それが持続可能なものとなるよう、業務全体のバランスを見ながら、軽減できる負担は軽減すべきだろう。関連して、事前に校内で研究協議を行う時間の確保を求める意見もあった。先に述べたように、今年

度から校内研究会の回数を3回減らし、年9回とした。その一方、IB教育研修を定期的を実施したため、授業研究会に向けた協議を行う時間が、校内研究会の時間に以前よりも設定できなくなった。結果的に、今年度の授業研究会においては、公開授業を行う教員に過度な負担がかかったことが最大の反省点と考えている。研究グループ制度が機能するために必要な時間数を確保し、学校全体として教育研究が円滑に行われるような体制づくりを検討する。一方、継続して実施したIB教育研修は、十分な時間こそとれなかったものの、ATLスキルについて継続して行ったことで、実際に授業でATLスキルをどのように扱い、それが生徒にどのような理解を促すものであるのかまでのが、系統だって整理できた。この成果を来年度実施予定の公開研究大会で報告できるよう、校内研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- (1) 山本勝治 (2023), 「「学びの転移」を促す概念・文脈の活用: 2022年度の校内研究と第8回公開研究会の報告」, 『国際中等教育研究 : 東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要第16号』, (2023年3月発行)
- (2) 文部科学省 (2017), 「中学校学習指導要領解説総則編」
文部科学省 (2018), 「高等学校学習指導要領解説総則編」
- (3) 国際バカロレア機構 (2022), 「MYP: 原則から実践へ」, (2014年版 2022年8月改定)

Educational Practices Utilizing the International Baccalaureate Educational System

— In-School Research and Open School for the 2023 School Year —

Abstract

The theme of this year's in-school research was “Conceptual Understanding Nurtured by Inquiry Questions: Instructional Development and Dissemination Based on the Aims of the IB,” and students were divided into eight “research groups” to develop lessons focusing on conceptual understanding. This report summarizes the purpose of the above research theme, the content of this year's in-school research, a summary of the class workshop held on Wednesday, November 22, and future issues.